

特集：能動的・自律的な学びを支援する学習環境の設計・構築・実践

読解支援としての表作成とキットビルド概念マップ作成の比較

林 雄介*, 溝下 祐理子**, 平嶋 宗*

Comparison between Tabulation and Kit-Build Concept Mapping for Reading Comprehension Support

Yusuke HAYASHI*, Yuriko MIZOSHITA**, Tsukasa HIRASHIMA*

1. はじめに

読解とはさまざまな定義が考えられるが、その一つとして、読み手が与えられた文章に即して一貫した心的表象を構築することで理解し、それを記憶として保持することができる⁽¹⁾。そして、構築される心的表象について、逐語的表象、命題的テキストベース、状況モデルの三種があるとされる⁽²⁾。逐語的表象は文章中の文言をそのまま記憶することを表すが、命題的テキストベースではその言い回しや統語構造を捨て、意味として関連のある情報が命題と呼ばれる単位でまとめられたネットワーク構造による表象が構成され、記憶として保持される。状況モデルは、さらに文章内容と自分の既有知識と結びつけたり、文章内容から記述されていないことを推論して、ネットワーク表象を文章の範囲を超えて拡張したものといえる。

このようないくつかのレベルで文章を理解し、記憶として保持する「読解」というタスクを支援する方略として、下線引きや意味段落分け、要約の参照や作成といったタスクが提案されており⁽³⁾、なかでも要約活動⁽⁴⁾やグラフの提示⁽²⁾、概念マップの提示や作成⁽⁵⁾の有効性が示されている。これらの活動は文章中の意味のまとまりを抽出し、ほかの形で書く、ま

たは描くことと考えられる⁽⁶⁾。これらの読解支援は、上記の分類に当てはめると、直接的には、表現を変化させることで命題の認識や命題間の関係付けをする命題的テキストベースでの心的表象の形成とその記憶を目的としていると考えられる。例えば、要約はある文章から特に重要な意味を抽出し、より簡潔にそれを表す文章を作成することであり、図表化や概念マップ作成は文章から基本的な意味のかたまりを取り出し、さらにそれを構造化させることと考えられる。このように表現を変化させて理解を表出させる活動は、読解のメカニズムにおいて最も重要な役割を持ち、読解促進方法として有効であることが示されている⁽⁷⁾⁽⁸⁾。これは、学習者が学習内容の構造について考えるという経験が学習内容の記憶に役立つ⁽⁹⁾ということであるとされる。本研究で目指しているのは、読解の定義を「理解」と「記憶」の二つから構成されることとし、学習者が読解において学習内容の構造について考える活動を行うのを支援することで、その場だけの理解ではなく、記憶に残る理解になることを示すことである。

一方で、表現を変化させる活動は自由度が高く、自由に要約や概念マップを作成させる読解促進方法では、表現の仕方やまとめる方針が一意に決まらないこと、多くの教育現場では教授者に対して学習者が多数

*広島大学大学院工学研究科 (Graduate School of Engineering, Hiroshima University)

**元広島大学工学部 (Formerly Department of Engineering, Hiroshima University)

受付日：2016年6月17日；再受付日：2016年10月6日；採録日：2016年12月27日